

令和 6 年 5 月 17 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K11888

研究課題名（和文）道に焦点を当てた、トルコ地中海地方の観光の発展と変容に関する社会人類学的研究

研究課題名（英文）A Social Anthropological Research on the Development and Transformation of Tourism in the Mediterranean Region of Turkey with a Focus on Roads and Local Footpaths

研究代表者

田中 英資（Tanaka, Eisuke）

北海道大学・メディア・コミュニケーション研究院・教授

研究者番号：00610073

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題の目的は、観光と道の相関に焦点を当てて観光と地域社会の関係性を捉え直すことで、移動（モビリティ）の一側面としての観光の社会的影響の考察することであった。トルコ西部地中海地方のアンタルヤ県において発展している「リュキアの古道（Lycian Way）」トレッキング観光の発展についての現地調査から、交通インフラとしての道路整備、観光開発、遺跡の保全・活用の相互作用の状況、特に、使われなくなっていた山道や未発掘の考古遺跡の観光活用、トレッキング観光の発展によるテケ半島沿岸部の地域社会の変化、特に伝統的生業（移牧）の記憶の継承を含めた遺産化の状況を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

トルコや欧米諸国の観光客の人気を集めている「リュキアの古道」トレッキング観光がトルコ地中海地方の地域振興に活用される過程を現地調査を含めて検証することで、観光資源と見なされた未発掘・未整備の考古遺跡や廃れた道や「伝統的」な生業が、「遺産」としての価値が見出されていく状況とその社会的影響を明らかにできた。トレッキングやフットパスといった「歩く」観光のあり方は、近年日本でも注目を集めるようになっていく。本研究課題で扱った内容には、トルコにおけるそうした「歩く」観光の活用の事例研究も含んでおり、日本における「歩く」観光にむけた地域資源の活用のあり方への示唆だけでなく、応用につながると考える。

研究成果の概要（英文）：This research aims to analyse the social effects of tourism on local communities. Specifically, it focuses on how mountain trails are utilised in the tourism development in the area. This study looks at the Lycian Way trekking tourism in Antalya province, southwest Turkey, as a case study. The field research revealed the ways in which obsolete mountain trails and unexcavated archaeological sites are utilised as tourism resources, social changes caused by tourism development in the villages along the Lycian Way trekking route, particularly the heritagization process of remains of the past found in Teke Peninsula, such as memories of transhumance, the traditional livelihood of the region.

研究分野：文化遺産研究、社会人類学

キーワード：観光 ヘリテージ 遺産化 トルコ トレッキング観光 道

1. 研究開始当初の背景

近年の観光研究では、もの、人、情報の移動（モビリティ）という観点から観光者のまなざしを彼らの身体化された行為とみて、観光者の身体的移動やそれに伴った空間の変容に観光の特性をみていく研究が活発になっている[Urry & Larsen 2011; 高岡 2014 など]。こうした移動の一側面としての観光の再検討は、観光によって生じている産業、行政、交通、空間、観光者などの様々な「つながり」の考察を深めるうえで成果をあげてきた。

これら先行研究をふまえ、本研究が着目するのは観光の移動的側面を支える道である。特に、本研究では道と観光の相関に焦点を当てる。地域に点在する観光資源は交通インフラとしての道によって結ばれ、観光ルートができるという意味で、道が観光をつくる。道はそもそも別の目的で整備された交通インフラが結果的に地域社会に観光を呼び込むことも多い。交通インフラの整備とともに行楽地が成り立っていくことに関する実証的研究は既に多い[例 平山, 2015]。一方、古代の街道や巡礼路は「文化の道」としてそれ自体が観光のための場所になるという意味で、観光が道をつくる。観光資源となった道と観光実践に関する研究も既にあり[土井, 2015]、観光ルートに焦点を当て、ルートが生み出す観光の自由さと不自由さについての検討も行われている[高岡, 2014]。しかしながら、観光と道の相関を正面に据えた研究は未着手といつてよい状況であった。

道はそもそも交通インフラであって、必ずしも観光を目的として整備されるものではない。上述の行楽地の形成の事例のように、別の目的で整備された交通インフラが結果的に地域社会に観光を呼び込むことも多い。そのため、道と観光の関係性は、ルートという観点だけでなく、ナショナルやグローバルといった次元のより大きな政治・経済・社会的文脈からも見ていく必要があると考えた。

2. 研究の目的

上記の研究背景をふまえ、本研究の目的は、交通インフラとしての道が観光の発展・変容にどのように関わっているかを問うことである。特に、道が観光をつくり、観光が道をつくるという相関を分析することを通して、観光者、受け入れ社会、観光資源が織りなす観光と地域社会の関係を動的かつ総合的に描き出すことを目指す。

本研究の特色は、既存の研究ではあまり注目されてこなかった道と観光の相関に焦点を当てて観光と地域社会の関係性を総合的に捉え直すことにある。それを通して、既存の観光研究における欠落を埋め、移動的側面からの観光研究に新たな地平を開拓することを目指した。

3. 研究の方法

本研究が事例として検討したのは、研究代表者がこれまで調査・研究に従事してきたトルコ西部地中海地方（ムーラ県～アンタルヤ県）において、近年注目集めるようになった「リュキアの古道」トレッキングルートである（図表 1）。トルコ南



図表 1 トルコ西部地中海地方

西部のムーラ県からアンタルヤ県にかけての地中海沿岸部は、20 世紀後半以降、地中海の青い海を魅力とした大規模な保養地開発が行われてきた。特に、先史時代からの長い歴史を物語る遺跡が残り、特徴的な岩窟墓などで知られる古代リュキアの文化遺産が観光の魅力の一つとなってきた。ただし、パターラ遺跡やミュラ遺跡など、史跡整備されて観光地化された考古遺跡も多い。ただし、現在でも多くの考古遺跡が未発掘・未整備のまま見つかる状況にある。

また、アンタルヤ県周辺では、伝統的な生業として季節移動型牧畜（移牧）が盛んに行われてきた。トルコでは、移牧に従事する牧畜民のことをヨリュク（yörük）と呼ぶ。この地域では、すでに大多数のヨリュクたちが 20 世紀後半までに移牧をやめて定住化した一方で、ヨリュクの生活様式は、この地域の伝統文化とみなされてきた。そのため、定住化した後もヨリュクであったことをアイデンティティの核とする地域住民も多い。加えて、夏は涼しい山間部の家で過ごし、冬は比較的温暖な海岸部の家で暮らすという季節移動型の生活様式は、年金生活に入った高齢者を中心に、現在でも維持されている。移牧を基盤とするヨリュクの暮らしが生み出してきた伝統的食生活や物質文化は、欧米諸国からの外国人観光客やトルコ都市部の中上流層の観光客にとっての観光の魅力となっている。

現地調査では、この地域における道路網の発展が生み出した観光と地域社会の関係性、特に、観光の目的となる場所（観光資源）の状況、観光者の移動のあり方や受け入れ側の動きについ

て、参与観察、聞き取り調査を行った。さらに、現地調査で得られたデータを文献調査で補充しながら、民族誌的に検証した。具体的には、パターラ、デムレ、及びこの地域で近年盛んになっている「リュキアの古道（英語：Lycian Way; トルコ語：Likya Yolu）」と呼ばれるトレッキングルートの発展と、その地域社会への影響に関する調査が中心となった。「リュキアの古道」は、ムーラ県有数の保養地フェティエ近郊をスタート地点に、アンタルヤ県西部のテケ半島沿岸部を歩く総距離約 710km のトレッキングルートである。テケ半島の険しい山々や海岸線がつくりだす景観、パターラ遺跡などリュキア文化の遺跡群を見所とし、それらを山間に残る放置された古代の道や移牧のために使われていた山道を組み合わせて設定されている。後述するように、1990 年代後半にトルコ在住の英国人女性ケイト・クロウ氏が地元の人々から情報を得ながら自ら歩いて設定したルートである。

なお、コロナ禍で渡航ができなかった 2020 年度と 2021 年度を除き、2018 年度から 2022 年度にかけて 5 回にわたって現地調査を実施した。概要は以下の通りである。

第 1 回現地調査

2018 年 10 月 5 日～15 日（調査地：アンタルヤ、パターラ）

内容：観光産業従事者に対する「リュキアの古道」トレッキングツアーに関する聞き取り調査。

第 2 回現地調査

2019 年 4 月 17 日～5 月 5 日（調査地：パターラ、ホイラン、カレキョイ（ケコヴァ）、アンタルヤ）

内容：パターラ、ホイラン、カレキョイ周辺の「リュキアの古道」トレッキングルートの踏査、アンタルヤでの旅行者への聞き取り調査。パターラで実施された「古代パターラ水道橋ウォーク（Antik Patara Su Yolu Yürüyüşü）」の参与観察（図表 2）



図表 2 古代パターラ水道橋ウォーク

第 3 回現地調査

8 月 17 日～9 月 16 日（調査地：カシュ、パターラ、カレキョイ）

8 月 28 日から 9 月 11 日については、研究分担者となっていた科研費基盤 C 「遺跡・遺構から見るアナトリア都市文化の通時的分析」（研究代表者：阿部拓児（京都府立大学））に関する調査を実施。

内容：カシュ、パターラ、カレキョイ周辺の観光産業の状況についての聞き取り調査。



図表 3 デムレ ケコヴァ・アウトドアと地元の食文化フェスティバルで「リュキアの古道」を歩く参加者

第 4 回現地調査

2019 年 10 月 10 日～10 月 29 日（調査地：パターラ、カレキョイ（ケコヴァ）、デムレ）

内容：カレキョイ周辺のトレッキングルートを歩く人々についての調査、「デムレ-ケコヴァ・アウトドアと地元の食文化フェスティバル」の参与観察（図表 3）。

第 5 回現地調査

2023 年 3 月 5 日～3 月 21 日（調査地：アンタルヤ、パターラ）

内容：コロナ禍で来られなかった期間に調査地域で起こっていた状況の変化の確認。

4. 研究成果

5 回にわたって実施したトルコ地中海地方での現地調査では、移牧が廃れて以降使われなくなっていた山道や未発掘の考古遺跡が「リュキアの古道」トレッキング観光に活用されている状況、トレッキング観光の発展が地域社会に与えている変化、特に伝統的生業の遺産化の状況について、参与観察、聞き取りなどから確認した。以下、研究成果についてまとめる。

(1) 「リュキアの古道」トレッキング観光の発展



図表 4 トルコの手銀行の支援で建てられた「リュキアの古道」の案内板

「リュキアの古道」トレッキングルートに関して重要なのは、このトレッキングルートが古代の街道や巡礼路のような歴史的なルートではなく、古代ローマ帝国の時代の道や、移牧が行われていた頃に使われていた道など、現在では廃れてしまった道をつなぎ合わせて設定された現代のルートであるという点である。さらに、このような形で観光ルートを設定したのは、トルコ在住の英国人女性ケイト・クロウ氏である。この地域の歴史に強い関心を持ち、トレッキングを趣味としていたクロウ氏は、地元の人々の協力を得ながら、テケ半島の山間部を自ら歩き、1990年代後半から数年の歳月をかけてルートづくりを行った。言い換えれば、「リュキアの古道」トレッキングルートの設定は、クロウ氏といういわゆる「外からの視点」で、地域内の

廃道や未発掘の高校遺跡が観光資源として見直されていった過程として捉え直せる。

また、「リュキアの古道」完成後の数年間は、クロウ氏が一人でルートの維持・管理に当たっていた。2000年代以降、トレッキング客が増加し始めるにつれて、ルート上にある町や村の宿泊・飲食業者やトレッキングツアーの手配を行う旅行会社だけでなく、トルコ文化観光省、国内大手企業なども彼女の活動を支援するようになった(図表 4)。2012年には、クロウ氏を中心にトレッキングルートの維持・管理を行う NGO「文化ルート協会 (Culture Routes Society)」が設立されている。それとともに、ヨーロッパ諸国の旅行会社とトルコ国内の旅行会社が結びついて、トレッキング客向けのツアー手配の仕組みができあがっている。さらに、トレッキング客の送迎サービスなどはヨリュクの人々の定住化後に左官になった農業の生産物の出荷のために整備されるようになった幹線道路なしには「リュキアの古道」トレッキング観光が成り立たない状況になっていることも現地での聞き取り調査から明らかになった。

(2)トレッキングルートを生かした地域振興



図表 5 カパクル村につくられた休憩所

トルコ国内外における「リュキアの古道」トレッキングルートの認知度は上がっており、SNSでは、#lycianway や#likyayolu といったハッシュタグをタグ付けした投稿がそれぞれ数万件の単位でヒットするようになっている。それとともに、ルート上の自治体もこれを活用した地域振興も行われるようになっている。特に、史跡整備され観光地化された遺跡だけでなく、未発掘の遺跡や、地域の伝統的な生活文化が観光資源として見直されることにつながっていることが現地調査を通して示された。

「リュキアの古道」を活用した自治体の観光振興の取り組みの例として、カパクル村 (Kapaklı) とゲレミシュ村が挙げられる。カパクル村では、「文化ルート協会」協力のもと

2017年に「リュキアの古道で歴史を知る休息 (Likya Yolunda Bir Tarih Molası)」と題した観光開発プロジェクトが実施された。村にトレッキング客向けの休憩所を設立し、村とその周辺に点在する考古遺跡を「リュキアの古道」トレッキングルートに組み込むことを目的としていた[田中 2020] (図表 5)。さらに、村での持続可能な観光開発を継続していくための「リュキアの古道」を活用した取り組みとして、2018年と2019年の秋にはアウトドアと地域の食文化をテーマにしたイベントも実施されている[田中 2021]。

このように、「リュキアの古道」は、既存の観光資源だけでなく、この地域でこれまで観光客の目に触れなかった未発掘の遺跡を観光資源化し、テケ半島における新しい観光のかたちを生みつつある。

(3)ルートの維持と開発の圧力

クロウ氏によれば、トレッキングルートを維持・管理するうえで問題なのは、土砂崩れや山火事などによって道が閉ざされることよりも、山間部で進む石材の切り出し場の建設や道路工事などの開発事業によって、道自体が失われてしまうことだそうである。実際、当初クロウ氏が設定したルートの20パーセント以上が山間部で進む開発事業の影響で修正せざるを得なくなったという。さらに、トレッキングルート沿いは、コロナ禍以降、家族連れや数人のグループ客に、キッチンやプール、ジャグジーなどを備えたヴィラを短期で一棟貸しする観光のあり方が特に人気を集めるようになっており、トレッキングルートの見所になっていた見晴らしの



図表6 近年、調査地域で建設が続いているレンタルヴィラ

良い場所にもそうしたレンタルヴィラが建設されるようになってきている(図表6)。こうした観光のあり方の変化も、トレッキングルート維持の阻害要因になっている状況もみえてきた。開発の圧力に対して、「文化ルート協会」は、トレッキングルートの維持していくために、新規および代替ルートの設定を積極的に行っている。その結果、2018年の調査開始時点でトレッキングルートの総距離は公称550kmとされていたが、2023年3月の調査の時点では710kmまで拡張された[Clow, 2022]。

聞き取り調査を行うなかで、様々な開発の圧力からトレッキングルートを維持するために、クロー氏を中心とした「文化ルート協会」が取ってきたもうひとつの戦略も指摘できる。それは、開発による影響が出るトレッキングルート

の周辺で考古遺跡などを見つけることである。トルコの文化遺産保護制度では、そうした遺跡が保存対象として認められると、遺構とその周辺は保存区域とされ、その土地利用は大きく制限される。そのため、結果として開発を進めることが難しくなる。「文化ルート協会」では、開発計画がトレッキングルートに影響する可能性がある場合、古い道やその周辺に見つかる遺構を探して関係当局に連絡し、保存区域として指定してもらう活動を進めている。つまり、クロー氏ら「文化ルート協会」は、文化遺産保護の観点、過去の痕跡に付与される「遺産」という価値によってトレッキングルートを維持しようとしているのである。

(4) 考察とまとめ

本研究では、トルコ地中海地方テケ半島で近年注目されている「リュキアの古道」に焦点を当て、トレッキング観光の発展のプロセスを、現地調査を通して検証し、ルート沿いの考古遺跡がいかにか「遺産」として捉え直されているのかについて考察してきた。

調査を通して、「リュキアの古道」トレッキングルートの設定は、未発掘・未整備の考古遺跡やこの地域の伝統的生業であった移牧にまつわる生活文化に、「遺産」という価値が認識される契機になってきたことが明らかになった。また、このトレッキングルートがルート沿いの地域で進んでいるさまざまな開発の圧力にさらされていることも示された。「文化ルート協会」がトレッキングルートの維持のために多大な努力を払ってきた事実は、地域社会の人々が必ずしもこうした遺跡に大きな関心を持っていないことを示唆している。その一方で、トレッキングルートを活用したイベントの実施を通して、地域の人々がそれらを観光資源として捉え直すことにもつながっている。

さらに、「リュキアの古道」トレッキングルートの発展は、観光開発がこの地域に残る様々な過去の痕跡に「遺産」の価値が認識される契機になることを示している。逆に、観光開発がこのルートの維持にも影響を与え、場合によっては阻害する要因にもなっている。これは、何を「遺産」とみなすか、あるいはそれを活用した観光開発自体への関心も、地域のなかで差異が生じている。本研究では道と観光の相互作用に着目したが、「遺産」という価値の認識プロセスと観光開発のプロセスの関係も、対立的というより相互作用的に捉えられることを改めて確認できた。観光と遺産の関係を相互作用的に捉えたときに、これらが地域に何を生み出しているのかについての検討を、今後の課題としたい。

5. 参考文献

- Clow, K. 2022 *Lycian Way*. Antalya: Upcountry Turkey Ltd.
- 平山昇 2015年『初詣の社会史: 鉄道が生んだ娯楽とナショナリズム』(東京大学出版会)
- 高岡文章 2014年「観光とメディアとルート: ルート観光論にむけて」『観光学評論』2(1): 29-42
- 田中英資 2020年「誰の遺産か?: トルコ国民意識の構築と古代アナトリア諸文明」『文化資源学研究』24: 13-27.
- 田中英資 2021年「『リュキアの古道』トレッキング観光を通じた遺産化: トルコ地中海地方デムレにおける『デムレ-ケコヴァ・アウトドアと地元の食文化フェスティバル』の事例から」『福岡女学院大学紀要人文学部編』31: 1-3.
- 土井清美 2015年『途上と目的地: スペイン・サンティアゴ徒歩巡礼路 旅の民族誌』(春風社)
- Urry, J. & Larsen, S. 2011[1990] *The Tourist Gaze 3.0*. Los Angeles and London: Sage.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 田中英資	4. 巻 31
2. 論文標題 「リュキアの古道」トレッキング観光を通じた遺産化 トルコ地中海地方デムレにおける「デムレ ケコヴァ・アウトドアと地元の食文化フェスティバル」の事例から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 福岡女学院大学紀要人文学部編	6. 最初と最後の頁 1-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 田中英資	4. 巻 24
2. 論文標題 誰の遺産か？：トルコ国民意識の構築と古代アナトリア諸文明	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 文化資源学研究	6. 最初と最後の頁 13-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 3件/うち国際学会 3件）

1. 発表者名 田中英資
2. 発表標題 未来を生み出す実践としての観光とヘリテージ トルコ地中海地方「リュキアの古道」トレッキングルートの事例から
3. 学会等名 観光学会 第13回大会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 田中英資
2. 発表標題 「伝統的な田舎の村」の変容 トルコ地中海地方ゲレミシュ村におけるレンタルヴィラの乱立の事例からみた観光イメージと現実の相互作用
3. 学会等名 観光学会 第12回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Eisuke Tanaka
2. 発表標題 “We are Turkish Nomads from Lycia:” The Changing Relationship between the Locals and Mountain Paths as ‘Heritage’ in the Context of Tourism in Teke Peninsula, South Turkey
3. 学会等名 International Colloquium on Line Cultural Transmission against Collective Amnesia: Bodies and Things in Heritage Practices (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 田中英資
2. 発表標題 「われわれはリュキア出身のトルコ系牧畜民だ」 南トルコ、テケ半島の観光状況におけるローカル住民と「遺産」の道の関係の変容
3. 学会等名 連続ウェブ研究会 文化遺産実践における身体とモノ 集会的健忘に抗するための文化伝達 (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Eisuke Tanaka
2. 発表標題 Ancient Lycia and the Nomadic Past: Heritage and Tourism in Gelemis, South Turkey
3. 学会等名 International Seminar on Heritage and Tourism (北海道大学メディア・ツーリズム研究センター主催 国際研究セミナー) (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田中英資
2. 発表標題 文化遺産、観光、地域社会のインタラクションと道：トルコ地中海地方「リュキアの古道」トレッキング観光を事例として
3. 学会等名 日本文化人類学会 第54回研究大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Eisuke Tanaka
2. 発表標題 Connecting Ancient Ruins with Ancient Roads: the Role of Heritage in the Development of Trekking Tourism in South Turkey
3. 学会等名 International Conference on Future of the Past: Tourism and Cultural Heritage in Asia 2018 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Eisuke Tanaka
2. 発表標題 From obsoleted footpaths to heritage: reconfiguration of old roads in the context of tourism development in south Turkey
3. 学会等名 15th EASA Biennial Conference - Staying - Moving - Settling (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------